

12月6日(金)2019年  
新潟日報

# Otona

おとなプラス

## 暮らしを支える土木の現場

ある中学校で「土木出前講座」を取材だ。皆さんの通る橋や道路を造っています。仕事が、土木の現場で働く人た。皆さんが寝ている時間に除雪をしま



阿賀野川大橋の補修工事に勤む作業員ら。寒い中、橋の下に入り、外からは見えない損傷を直していた

す」。知っているはずの内容なのに、なぜ新鮮だった。日ごろ、あまり意識しない土木の仕事がいかにか大切に、改めて気付いたからかもしれない。

講座の狙いは、若い世代の関心を高め、土木業界に就職してもらおうことだ。その狙いから大きく外れた38歳の私で申し訳ないが、工事現場が気になるようになった。

いつ見ても「大変な仕事だ」と感じる。一番は天候。橋や道路での作業は当然、屋外。暑さや寒さは避けられない。夜間の道路工事にもよく見る。交通への影響を少なくするために、たまた、作業員の生活は不規則になるはずだ。

土木は木材、鉄材、石、土砂などで道路、堤防、鉄道、橋などを造る工事を意味する。「建築」は家や会社など、人が住んだり、働いたりする建物を造ること。土木や建築を総称して「建設」と呼んでいる。

日ごろあまり意識しないが、私たちの生活に欠かせない「土木」。厳しい寒さの中、暮らしを守るために熱い思いで働く人たちを訪ねた。

（報道部・大倉奈々 文）



深夜、阿賀野川大橋の工事現場で働く人たち。私たちの暮らしを支えるため、深夜や早朝も奮闘する

（日刊）新潟日報 2019年(令和元年)12月6日(金曜日) 第3種郵便物認可 特集 2

土木の仕事は橋や道路を新しく造るイメージが強い。しかし近年は、高度経済成長期（1950〜70年代）に造られた橋などが老朽化し、その補修が重要性を増している。国道7号・新新バイパスにある阿賀野川大橋（新潟市東区）北區、903号）もその一つだ。11月中旬と下旬、補修工事の現場をのぞいた。

### ■阿賀野川大橋(新潟)補修に密着

### 過酷な作業 寒さに耐え



部材を橋の下から、橋の上に搬出する作業。車線を規制するため、車の通行量が少ない夜間に行う

国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所（新潟市中央区）によると、阿賀野川大橋は新潟市から新潟田市に向かう「下り線」が1977年、「上り線」が86年に建設された。老朽化が進んでおり、2016年から補修工事が行われている。工事を担当するシヨーポンド建設（東京）の社員で、安全管理などの責任者を務める現場代理人・中村漢太



呼ばれる部材の交換だ。阿賀野川大橋には120基があるが、橋とともに老朽化が進んでいる。橋を支える重要な部材のため、数年をいかに寒い日や、夏の暑い日トンネルや橋が形として残は大変と苦笑い。やはり、地域で使われることも寒さは大変なのだ。ふと頭上を見た。車は全縁の下で力持ち

「うわっ、寒い！」この日は特別に風が強。言うひ弱な私を横目に、新車からも工事の様子が見え、肌が痛い。早くも建設業の大変さを体感できた。と前向きに考えることにしよう。

この日の作業は、橋と橋台、または橋と橋脚の間にある「支承」を図参照し、まめに声を掛けながら息を



橋の下で溶接作業を行う作業員。狭い場所も多く、腰をかかめる姿も目立った

橋の下の工事現場につながる階段。約8段、作業員しか使用できない